

消費吉レポート

第1340合併号 2006年8月17日

〒162 0042 東京都新宿区早稲田町75
電話03(5155)4765 ファクス03(5155)4767
E-mail:nishoren@jca.apc.org
http://www1.jca.apc.org/nishoren/

発行責任者 富山洋子
発行所 日本消費者連盟

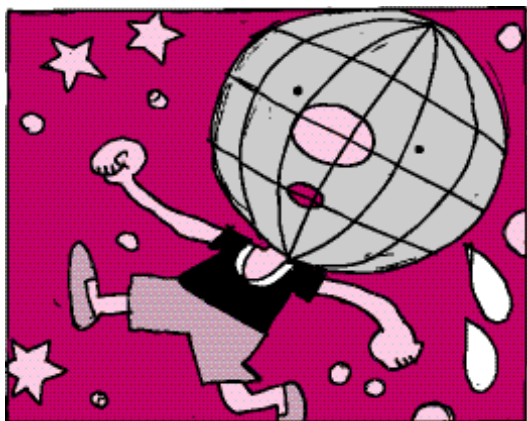
会費 年間7,000円 前納制 郵便振替00130-0-22957

夏は誰にとっても、一年のうちで最も心躍る季節です。でも、それは虫たちにとっても同じこと。人間にとってもあまり快くない虫たちも活発につこめきます。高温多湿を好む細菌たちも、大いに仲間を増やしています。これも人間にとっては悩みの種です。そして、強い日差しにジリジリと焼かれ、少し動けば汗のような汗。放っておけば、すぐに肌は真っ黒。服には汗がしみ込み、臭いすら漂うことも。自分自身すら不快になります。

そんな私たちを待ち受ける夏の誘惑。それが「夏の化学物質」です。

本当の快適を求めて

カイチュウ博士の異名をとる東京医科歯科大学教授の藤田紘一郎さんは、著書『日本人の清潔がアブナイ!』の中で、日本の若者に蔓延する「不潔恐怖症」を心配して、こう言われています。



特集 あぶない夏の化学物質

「生きていくものであればさまざまなおいが発生して当然だ。それで『個』を主張するのだ。動物がおいを消す時は死を迎える時なのだ。」

藤田さんはさらに、汗を出さなくする制汗剤、皮膚常在菌を抑え込む抗菌剤について次のように言います。

「人間はただ無意味に汗を出しているのではない。発汗は熱の発散や感情の高揚時に重要な役割を演じているものだ。皮膚常在菌は病害細菌とたたかって排除し、外からの有害物質の皮膚内への侵入を阻止して、僕たちを守ってくれている重要な菌なのだ。」

目を浴びる、体温が上がる、汗をかく汗が常在菌の工サになる、常在菌が体を守る。体の表面ですら、環境に適応したいのちの循環が存在し、それがいのちを

支えています。その延長線上に、身の回りの虫たちや細菌も存在しています。そうした循環の一節として、私たちは存在しているのです。

確かに、虫も細菌も、日焼けも汗も、ときには不快でしかありません。しかし、そこそこ生きていくことの証、地球のいのちが一番活動的な季節に、自分のいのちもまた太陽とともに躍動しているといふことではないでしょうか。

化学物質は、そうしたいのちの循環を断ち切ります。それは私たちにとって、果たして快適なことなのでしょうか。目先の快適さにとらわれず、私たちにどうして本当の快適とは何か、一緒に考えてみませんか？

(吉村英一)

おもな記事

消臭・除菌スプレー……
家庭用殺虫剤……
制汗スプレー! 日焼け止め
発泡酒・ビール風飲料……
FTAで進む労働・サービスの自由化……
再処理工場で被曝事故……
脳死判定後に意識回復……

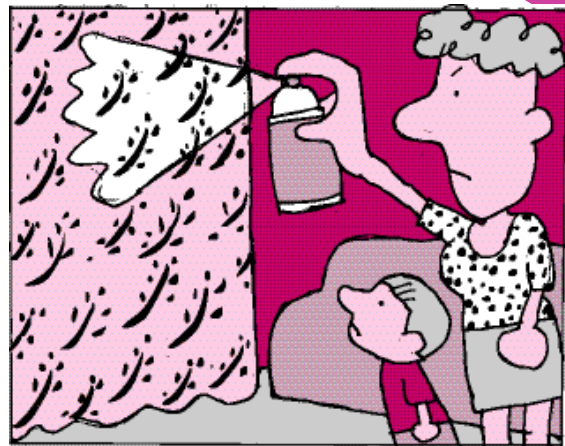
今号は合併号ですので、次号は9月7日発行です。

ファイルしてあげてください。後でお役に立つと思います。

特集 あぶない夏の化学物質

消臭・除菌スプレー

渡辺雄二 科学ジャーナリスト



安全なの? 気になる
テレビコマーシャル

テレビで毎日のように放映されている消臭・除菌スプレーのコマーシャル。カーテンやソファ、寝具や背広にまでスプレーしている光景を見て、使い方や安全性に疑問を感じた人も多いと思います。消臭・除菌スプレーは、企業が無理に作り出した必要で安全性

なども知られていま

す。(ヒノキチオールやキトサンなど)があります。

家庭内で使われる製品につ

いては、家庭用品品質表示法

によって、成分や材質などの表示が義務付けられています。

しかし洗剤や漂白剤などは対

象になっていますが、消臭・

除菌スプレーは対象になって

いないため、抗菌剤や界面活

性剤などの具体名が表示され

ていません。これだけ多くの

家庭で使われるようになって

いるのですから、速やかに対

象に加えるべきでしょう。

除菌剤の成分塩化ベンザルコニウムの毒性

除菌剤の第4級アンモニウ

ム塩は、逆性石けんの成分で

あり、そのひとつに塩化ベン

ザルコニウムがあります。塩

化ベンザルコニウムは、消毒

液、洗浄液、化粧品などにも

使われています。

しかし、急性毒性が強く、

人間が経口曝露した場合、吐

き気、嘔吐、下痢、筋肉の麻

痺、中枢神経の抑制などの症

の疑わしい製品の典型といえ

るでしょう。

販売競争が激化する 消臭・除菌・抗菌分野

この分野では、先鞭を切っ

たP&G「ファブリーズ」の

独走状態でしたが、2005

年8月に花王「リセツシュ」

が発売され、激しい市場争い

をしています。ほかに、エス

デー化学「エアウォッシュ」

除菌成分は、その名の通り

細菌を取り除くものです。臭

いは、タンパク質などを微生

物が分解することで発生する

ため、除菌剤で微生物の増殖

を抑えて臭いの発生を防ぐこ

とというわけです。除菌剤は、

一般的には有機系(第4級ア

ンモニウム塩やクワルルヘキシ

ンなどの有機化合物)、無

機系(銀や銅等)、天然系

ファブリーズ

ファブリーズは

くつかタイプがあり

ますが、主な成分は

トウモロコシ由来消

臭成分、除菌成分

(有機系)、香料です。

トウモロコシ由来消

臭成分は、トウモロ

コシデンプンから作っ

た環状の糖類で、ド

ナツ状の構造をして

おり、その空洞の部

分に臭い成分をとら

えるといいます。

リセツシュの成分は、両性

界面活性剤、緑茶エキス、除

菌剤、香料です。両性界面活

性剤は、プラスとマイナスの

電荷を持つ界面活性剤で、酸

性、あるいはアルカリ性の臭

いの分子と結合し、中和して

消臭するといえます。緑茶エ

キスは、天然の茶葉から取り

出した消臭成分のこと。除

菌剤は、ファブリーズとほぼ

同じです。

エアウォッシュ

エアウォッシュは、植物抽

出消臭剤、香料、抗菌剤、非

イオン界面活性剤、エタノ

状が現われます。また水溶液は、0・1%以上の濃度で眼(結膜)などの粘膜組織や皮膚を強く刺激します。

アレルギー性ぜん息発症事例も

塩化ベンザルコニウムをラットに経口投与した実験では、出血性の胃腸障害、またウサギへの経口投与では、肺と肝臓に障害が見られました。妊娠したウサギへの経口投与では、胚の異常が観察され、妊娠ラットへの膈内投与では胎児に発育異常が見られました。

また、塩化ベンザルコニウムを含む床用洗浄液を使用後に、室内に残存する成分への曝露によって、アレルギー性ぜん息が発症した事例が知られています(以上のデータは泉邦彦著『有害物質小事典』研究社刊による)。

両性界面活性剤は、洗浄力と殺菌力の両方を持っていますが、合成界面活性剤のなかでは、毒性は弱い方とされて

います。

安易な消臭・除菌スプレー使用は愚かな行為

ファブリーズやリセツシユを使うと、成分が霧となって広がるので目に入るとしまい、軽い痛みを感じるのですが、除菌成分などが原因のようです。

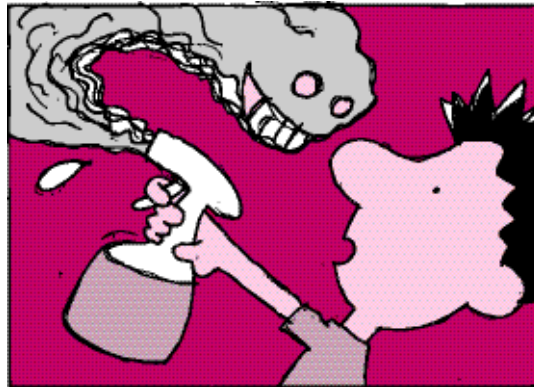
これらの化学物質を含む製品を室内でスプレーした場合、ぜん息やアレルギー性鼻炎、化学物質過敏症の人の場合、症状が現われる可能性があります。カビの発生を抑えてアレルギーを防ごうと、消臭・除菌スプレーを使ったら、かえってアレルギーがひどくなつたというケースも起こり得るのです。

また、無害な細菌まで除菌してしまうことによって、人間が細菌に曝される機会が少なくなり、体の免疫力が低下する可能性も考えられます。さらに、除菌成分によって、耐性菌が生み出されるとい

問題もあります。

室内の臭いをなくすには、通気性をよくする、壁やガラスなどに付着した臭い成分を拭き取るなどして元を断つ必要があります。

消臭・除菌スプレーでは、



臭いの元を断つことはできません。それに決して安い製品ではありません。高いお金を払って、安全性の疑わしい化学物質を部屋にはらまくという愚かな行為はやめてもらいたいものです。

抗菌・除菌・殺菌の違いってなに？

抗菌とは

抗菌・除菌・殺菌とは、モノについた細菌を取り除いたり、増やさないための作用のことです。この場合の菌とは病原性を持った菌が対象で、代表的なものでは食中毒の原因となる大腸菌やサルモネラ菌、化膿の原因となるブドウ球菌、どのの炎症の原因となる緑膿菌などです。

殺菌とは

殺菌とは、もともと薬事法のもとで使われる医学用語ですから、法で定められていないものに使ふことは不適當な場合があります。たとえば消毒薬などの「医薬品」や薬用石けんなどの「医薬部外品」では使われますが、洗剤や漂白剤・消臭・除菌スプレーなどでは使えません。

ことばの意味は細菌を死滅させるということです。

除菌とは、存在する菌を濾過や洗浄によって数を減らし、除去することで清浄度を高めるといふ意味です。菌の個数の変化に関する一般的な規定はありません。

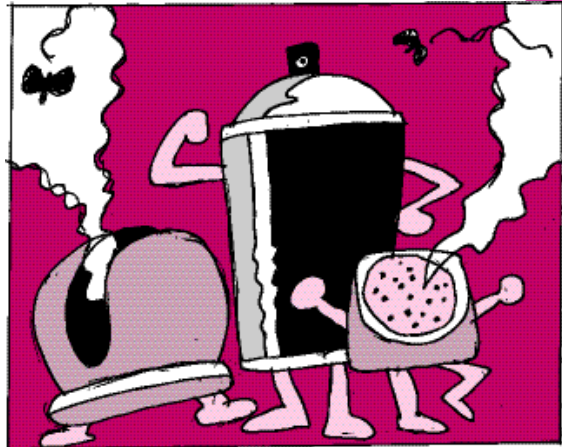
抗菌とは、モノの表面に存在する菌の増殖を防止すること。そこが殺菌や除菌と違う点です。また、その効果は一時的ではなく、長期間の効果が持続することです。除菌・抗菌は、一般的に使える用語で、薬事法の医学用語ではありません。

無数にいる菌には、乳酸菌や納豆菌など有益なものや、有機物を分解するなど環境や人の健康にとって重要な働きをするものも多数います。決して無菌が良いわけではありません。(植田靖子)

特集 あぶない夏の化学物質

家庭用殺虫剤

反農薬東京グループ 河村宏



他社も類似品を販売しています。

03年夏、反農薬東京グループにジェット式の危険性について、告発がありました。

ジェット式は従来品よりも噴射量が3〜5倍、可燃性のDME(ジメチルエーテル)やプロパンが噴射剤として使用されているため、火災

の長さが2・5倍以上であり、99年には

埼玉県幸手市の倉庫火災、03年には、名古屋市の輸送トラック横転事故で、大量のスプレー缶の爆発事故が起っただけでなく、家庭での火災事故も発生しているとのことでした。

また、スプレー缶の使用寿命が3分の1〜4分の1短くなり、廃棄物処理費用を高め、環境上も問題がある点も指摘されていました。

この告発を受け、経済産業

省原子力安全・保安院で、国内販売の全ジェット式殺虫剤スプレーについて、高圧ガス保安法に適合するかどうかの試験が実施されました。

04年4月に公表された結論では、88年に同法の安全性の規制緩和がなされたことには触れず、法律違反はみられない、表示内容通りに使用された場合、製品の火災誘発の危険は問題ないとされただけでした。

しかし、ジェット式スプレーの実態は『女性の3人にふたりは、ジェット式を危険で資源の無駄使いと感じているの』ということでしょうが。

携帯蚊取り、虫除けうちわなど新製品が続々

スプレー型だけでなく、長期連続使用できる蚊取り器や小型ファン内蔵の携帯用や腕輪形式の製品も出ています。

たとえば、大日本除虫菊の蚊取り用の製品には据置型の『蚊に効くカトリス』と携帯

型の『おでかけカトリス』があり(いずれも薬事法の医薬部外品)、前者にはピレスロイド系のトランスフルトリンが、後者には、メトフルトリンが使用されています。

05年、ピレスロイド系薬剤を含む印刷インキを使った虫除け剤を放出するうちわを販売したサクラクレパスは、06年はどんなうちわにも貼れる虫除けシールを売りだしています。その効果の持続は3日程度だそうで、適用対象は、ユスリカ、チョウバエ、イガとなっており、薬事法の対象外である「雑品」扱いです。

帝人ネステックスとアリス製薬は、殺虫剤入り防蚊服「スコロン」の販売をしています。ポリエステル繊維にピレスロイド系薬剤を固着させた衣服で、独特の臭いがあるものの無害であることは検証済みと宣伝されていますが、「肌着・Tシャツなどを着用する際は、ご使用ください」とあり、直接肌に触れてはな

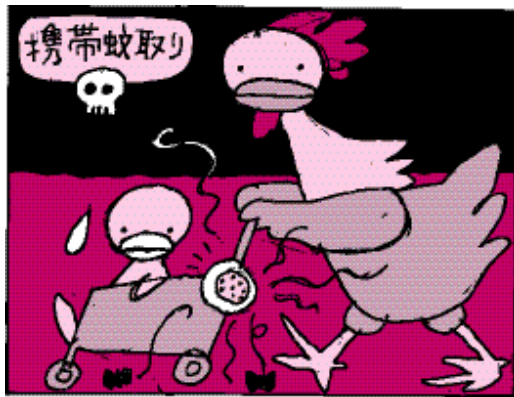
目に余る殺虫剤の宣伝
ピレスロイドの問題点

毎年、夏になると殺虫剤等のテレビコマーシャルが目立ち始めます。2005年に問題となった、デイト含有の虫除け剤、ジョンソン「スキンガード」のときでもコマーシャル(幼女に直接スプレーしていた)は、厚生労働省による使用規制通知(6か月未

満は禁止、6か月から2歳未満は1日1回、2歳から12歳未満は1日1〜3回)のためか、少し内容がかわったようです。

告発されたジェット式スプレーの危険性

06年のコマーシャルで目立つのは、ジェット式殺虫剤スプレーです。この製剤は、アス製薬が開発したのですが、



らない製品のようなです。

蚊に刺されるとひどくはれたり、アレルギー症状を示す「蚊刺過敏症」の方もいます。が、それでもないのに、むやみやたらと殺虫成分で身の回りの空気を汚染するのは考えものです。

アウトドア用製品を室内に持ち込んだとき、スイッチを切ったり、取り外して密封保存することを、きちんと守れるか疑問です。もし、室内で複数を同時使用したら、どうなるかをメーカーは考えたこ

とがあるのでしょうか。

毒性評価もまだのピレスロイド系殺虫剤

食品の農薬等のポジティブリスト制度が実施されましたが、残留基準が設定された799種の農薬等の中には、ADI(1日摂取許容量)評価がなされていないものが多いです。その中に、食品安全委員会が優先評価する5物質のひとつとして、ピレスロイド系殺虫剤アレスリンが挙げられています。

アレスリンは、農薬や家畜用の殺虫剤として使用されているとともに、市販されている蚊取り線香の多くに含有されており、食品残留だけでなく、生活環境での空気汚染が懸念される物質です。このような殺虫剤が、いままでもADIの評価もされずに、身のまわりで使われてきたこと

は、おおいに問題にすべきでしょう。

ピレスロイド系殺虫剤に対して、アレルギー症状や頭痛などを起こす過敏な人もいます。また、その中には環境ホルモン作用があったり、脳・神経系への影響や化学物質過敏症などとの関連が疑われているものもあります。30日、60日、120日タイプのように、四六時中使用続けるのに、生活環境の汚染状況の調査も十分ではなく、慢性・発がん性毒性も不明です。

ゴキブリ・ハエ・蚊退治用DDVPの強い毒性

室内空気汚染がひどいことが判明しているゴキブリやハエ・蚊退治用の蒸散性の高い有機リン系DDVP(ジクロロルボス)殺虫剤は、急性毒性が強くほとんどが劇薬指定されている一番に追放すべき製剤ですが、ピレスロイド系物質の乱用も考え直す必要があるでしょう。

虫除け剤のほとんどに使われている成分はディートです。使用方法は多様で、スプレー式のものからクリーム、ウエットティッシュに含ませて直接肌につけるものなどさまざまあります。ディートの危険性とはどんなものなのでしょうか。

虫除け成分ディートの毒性報告

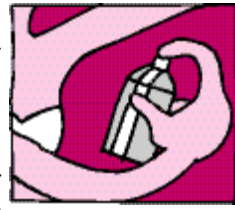
中除け剤の使用は、スプレー式は吸入するおそれがあるのでやめた方がいいでしょう。また直接顔や手につけるのも避けましょう。手につけると口や目に触れる恐れがあります。使用後は、必ず皮膚を石けんで洗うか入浴し、衣服も必ず洗濯しましょう。

ディート(化学名ジエチルトルアミド)は1946年アメリカ軍が蚊やダニから兵士を守る薬剤として開発しました。これまで安全性が高いと思われてきましたが、まれに神経障害を引き起こすなどの事例がカナダやアメリカで報告されています。日本では2005年6月、厚生労働省からディートに対する安全対策について通知が出され、『たしかな目』05年7月号で紹介されています。それらによると虫除け剤の使用は、野外では9割以上で、子どもは約6割が2歳未満が

皮膚から取り込み安くなる指摘され、その複合毒性によって湾岸戦争症候群の発症との関連も注目されています。やはり安易に虫除け剤に頼らず、使用頻度を考え、できるだけ長袖、長ズボンを着用し露出部分を減らして防ぐ方がいいようです。(植田靖子)

特集・あぶない夏の化学物質

危険もひと吹き、制汗スプレー



この季節になる
と、中高生くらい
の女の子が、わき
の下などに気持ち
よさそうに「アフ
レイ」を吹き付けて
いる
テレビコマーシャルが目を見えます。
いわゆる「制汗スプレー」の季節到来。
最近では、女性のみならず、男性用の
同種の商品も発売されています。

でも、ちょっと待って下さい。制汗
スプレーの多くには、発がん性の疑い
がある化学物質、ジブチルヒドロキシ
トルエン(BHT)が含まれているの
をご存じでしたか？

BHTは、同じく発がん性が指摘さ
れているブチルヒドロキシアニソール
(BHA)に似た物質で、酸化防止剤
として食品や化粧品、医薬部外品に広
く使われています。食品に対しては魚
介冷凍品(クジラを含む)や魚介乾燥製
品、油脂、チューインガムなどの7種
に限定され、それぞれ濃度も規制され
ていますが、化粧品などについては、
特に規制がありません。

強い変異原性(遺伝子に異常を
起こさせる毒性)があり、ラット
を使った実験では、肝臓にがんを
発生させることが確認されていま
す。一方、催奇形性(奇形を生じ
させる性質)の疑いも指摘され
、BHTを与えたラットの子に無眼
症が認められています。そのほか
皮膚炎や脱毛、体重低下などの毒
性も指摘されています。

BHTは、ライオンの「Ban
(バン)」、花王「8×4(エイト
フォー)」、「メンズビオレ」シリー
ズのほらなどに含まれています。
これらを、わきや首すじなど、比
較的口や鼻の近くでシュッとひと
吹きしたら・・・。

さらに問題は、制汗スプレーは
医薬部外品ですから、化粧品のよ
うに全成分表示がないことです。
特にBHTは、他の物質と結合し
て毒性を高める可能性もあること
から、ほかに含まれるものによつ
て、その危険性はまったく違つて
くるのです。

まだまだ夏には危険がいっぱい！

夏の化粧品と言えば、日焼け止め



夏の化粧品と
いえば、やはり
UVカット、日
焼け止め(サン
スクリーン)が
目立ちます。
夏の日焼け止めは、紫外線が肌を焼
くのを防ぐ化学物質をクリームや
乳液に添加したものです。そのうち
「紫外線散乱剤」は、主に酸化チ
タンや酸化亜鉛などの粉末で、こ
れらが鏡のように紫外線を反射し
ます。ただし、どうしても粉っぽ
さが残ってしまうことから、いま
は化学反応で紫外線から肌を守る
「紫外線吸収剤」が主流のよう
です。紫外線吸収剤は、それ自体が
紫外線を吸収することで、皮膚へ
の浸透を防ぎます。

ただし、この化学反応が肌にとつ
て負担が大きいため、肌が敏
感な人はかぶれなどを起こす場合
があります。実際、紫外線吸収剤
には、化粧品が現行の全成分表示
になる前は、「アレルギー」等の皮

膚障害を起こすおそれのある成分」と
して、表示指定成分に指定されてい
たものも少なくありません。
さらにオキシベンゾン、イソプロピ
ルメチルフェニール、ベンゾフェノン、
ホモサレートなどは、環境ホルモン作
用が指摘されています。
最近ではさすがにこうした成分を使
用するものは少なくなり、紫外線吸収
剤の中では比較的毒性の低いメトキシ
ケイヒ酸オクチル(資生堂「アネッサ・
パーフェクトUVサンスクリーン」な
ど)が主流となっているようです。
しかし、これとてれっきとした化学
物質。もともとは印刷インクの退色防
止剤として使われていたものだともい
われています。人間の体はポスター用
紙ではありません。インクの添加物を
体に塗りたくっていると考えると、ちょつ
とゾッとします。

建材などに使われる紫外線吸収剤の
中には最近、製造・輸入禁止が決めら
れたものもあります。とにかく、紫外線
吸収剤には危険なものが多いようです。
(吉村英一)

